法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

富士山をめぐる日本人の心性

KANAYAMA, Yoshiaki / YOKOYAMA, Yasuko / SAWATO, Hirosato / YAMANAKA, Reiko / AMANO, Kiyoko / 金山, 喜昭 / 天野, 紀代子 / 山中, 玲子 / 澤登, 寛聡 / 横山, 泰子

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
1
(開始ページ / Start Page)
119
(終了ページ / End Page)
137
(発行年 / Year)
2003-10-31

富士山をめぐる日本人の心性

日本的なるものの再検討を意図する本プロジェクトは、日本の象徴ともされる富士山をめぐって様々な角度から探究する共同研究会を発足させ、問題意識を共有してきた。富士山への「まなざし」は時代によって異なるが、そこに日本人の心の在り方を探るとともに、外国人の視点を導入することによって自らを捉え直し、富士山学の総合化を目指す。

外国人の浮世絵に描かれた富士山への関心は、図像学に発展し、民間信仰の研究にも及んでいる。最近では、2001年に大英博物館で“100 VIEWS OF MOUNT FUJI”と題する展覧会が行われ、全160頁を超えるカラー版カタログが出版された。江戸時代以前の絵画や浮世絵だけでなく、現代絵画まで含めて「富士の絵姿」を集めた、Timothy Clark氏（同博物館、Head of the Japanese section）による労作である。カタログ冒頭の同氏による解説“Mount Fuji in the Landscape of Japanese Art”は、富士山のイメージと日本のアイデンティティとの関わりについても論じており、我々のプロジェクトにとっても学ぶところの多い、興味深い企画である。

また、アメリカ浮世絵学会の学会誌“IMPRESSIONS”の最新号（2002年11月）には、Melinda Takeuchi氏の論文“Making Mountains: Mini-Fujis, Edo Popular Religion and Hiroshige's One Hundred Famous Views of Edo”が掲載されている。広重の「江戸名所百景」に描かれた江戸の富士塚についての考察だが、富士信仰に関する先行研究（日本人によるものも外国人によるものも含む）を十分ふまえ、富士信仰の歴史や江戸時代の富士講の分析にも多くの頁が割かれている。ミニチュアやレプリカを造ることの意味について西洋と東洋を比較する視点などもあり、まさに外国人の視点による日本研究として興味深い。

本プロジェクトは、こうした海外の研究成果を採り入れつつ、こちらからも最新の研究成果や情報を発信していく方針である。今回は、中間成果として以下のように報告する。縄文時代から近代まで、時代を追って５人が担当し、執筆した。

Ⅰ　富士山と先史時代

金　山　喜　昭

本研究は、これまで研究対象外とされてきた富士山と縄文時代の記念物のあり方を通じて、先史時代人は富士山をいつから意識するようになったのか、またその変遷や、意識化が縄文の社会生活においてなにを意味するのかについて考察する。

その方法としては、近年注目されている、「縄文時代の記念物とランドスケープ」という視点を採用する。小林達雄（小林2002『縄文ランドスケープ』NPO法人ジョーモネスクジャパン機構）は、縄文人の意識や世界観を研究する上で、これまで各地の縄文遺跡から出土した記念物を、遺跡周囲の自然景観とのつながりの中で再検討した。記念物とは、①石を並べてカタチとする類、②木柱を立て並べる類、③土を盛り上げる類に分類される。これまで、記念物は、それ自体の機能の解明が主に研究されてきた。例えば、環状列石の墓地説はその典型例である。しかし、小林の視点は、記念物の構築は、遺跡から望む三角形の山（神奈備型）を意識して行われており、それは縄文時代の自然景観（ランドスケープ）を縄文人が空間認識をして社会生活に採用していたと評価する。類例としては、縄文前期の長野・阿久遺跡の環状列石と蓼科山、秋田・大湯の環状列石と付近の黒又山（クロマンタ）などがある。

作業は、縄文時代の拠点集落を対象にして、記念物である配石や列石に着目して、富士山が望めることを前提条件にして、該当遺跡のリストアップ作業を行う。その後、現地踏査を実施して、遺跡から望む富士山の景観を確認する。それらのデータに基づき、研究目的を考察する。なお、本文はその中間報告と予察である。

富士山の活動史

富士山は、日本で最大の火山である。富士山は、小御岳火山活動期（70～20万年前）、古富士火山活動期（７～２万年前）、新富士火山活動期（1.1万年前～現在）を経て、現在の山容を呈するようになった。ここで対象とする富士山は、新富士火山活動期に相当する。この時期の富士山の噴火活動史は、次のように

推定される（宮地直道1988「新富士火山の活動史」地質学雑誌94（6））。

11000～8000年前　：山頂火口および側火口から極めて多量な溶岩が流出する。

8000～4500年前　：山頂火口から小規模なテフラが間欠的に噴出する。

4500～3000年前　：山頂火口および側火山群から大規模な溶岩と小規模なテフラが噴出する。

3000～2000年前　：主として山頂火山から大規模なブリニー式噴火のテフラが頻繁に噴出し、少量の火砕流と溶岩がこれに伴う。

2000～243年前　：側火山群から小規模～大規模なストローンボリ式～準ブリニー式噴火のテフラと溶岩が噴出する。

243年前　：山頂近傍の側火口から大規模なブリニー式噴火のテフラが噴出する。

このうち側火山の顕著な活動期は、11000～8000年前、4500～3000年前、2000～243年前の３時期である。

富士山周辺の縄文遺跡

富士山を遠望できる拠点集落で、配石を伴う遺跡は次のとおりである。

窪Ａ遺跡（静岡県沼津市）：縄文時代早期（約9000年前）、富士山の火口から約20ｋｍ南西の芝川左岸に立地。配石。住居址９軒が馬蹄形状に並ぶ。特徴的な遺物としては、大量の石鏃と石皿・磨石などである。

千居遺跡（静岡県富士宮市）：縄文時代中期末。標高400mの千居丘陵に立地する。配石12基には環状列石5基、帯状列石が含まれる。その中には富士山に向かい帯状（直線状）に配置されるものがある。住居址21軒、土抗61基。土器の中には器高50cmをこえる大形のものがある。

その他、滝沢遺跡、若宮遺跡、上の段遺跡なども類例であるが、関連遺跡のリストづくりは継続中である。

富士山と縄文社会

先史時代人が果たして、いつから富士山を意識したのかというテーマについては、富士山を望むことができ、かつ配石などの非日常的な遺構の存在を根拠にするならば、縄文時代早期の窪Ａ遺跡が最も古い時期である。それ以

前の旧石器時代にも富士山麓には遺跡が分布するが、いずれの遺跡も富士山を意識したと推定できる痕跡は見られない。このことは、旧石器人が富士山を必ずしも意識していなかったということではなく、意識をしていたとしても窪Ａ遺跡のように遺構に痕跡をとどめる意識の仕方とは別のあり方であったことを窺わせる。

窪Ａ遺跡は、ほぼ同時期からなる９軒の住居址が馬蹄形に配列するが、馬蹄形の開口部が富士山に向かっている。また開口部には溶岩を同心円状に積んだ配石も存在する。つまり、広場の中央から配石を通して、約20km前方の富士山を望む。あたかも、広場から向かうと神社の拝殿と御神体のような関係が成り立つ。

富士山の山麓部には同時期の遺跡が分布するが、それらはいずれも窪Ａ遺跡に比べて小規模な集落である。つまり、窪Ａ遺跡が拠点的な集落であるのに比べて、分散的な集落といえる。縄文時代の集落は、それぞれが自己完結するものではない。例えば、拠点的な集落と分散的な集落との関係は、一定の生活圏内に住む数十人程度の集団が四季の変化にあわせて行う狩猟や採集、また集団内の社会的生活（儀礼や祭りなど）、あるいは他の地域の集団との物資の交換や人の交流などに応じて、集落を離合集散する。つまり、拠点的な集落は集団がひとつになる場として、そこでは共同で生活道具を製作したり、集団の社会生活の場として集団共同の儀礼や祭りなども行われたり、冬季には集団生活により越冬する。分散的な集落は採集や狩猟の出先の場などであったと推定される。実際、窪Ａ遺跡では石鏃が出土していることから、共同で石鏃を製作していた可能性がある。つまり、窪Ａ遺跡の縄文人が富士山を空間的に認識することで、自らの社会生活に取り込み、それを対象化した共同祭祀のようなものが行われていた可能性が指摘できる。

縄文時代中期末の千居遺跡では、配石群中の２つの列石は直線状に富士山に向かっているので、窪Ａ遺跡とは、遺構のあり方に変化が見られる。縄文時代早期以降、縄文人が富士山をどのように意識化したかは、今後とも類例を増加させながら検討していく。

Ⅱ　富士山と平安朝文芸

天　野　紀代子

本研究では、平安時代における富士山へのまなざしを和歌や説話などの文芸作品に探り、とりわけ後の時代への影響の大きかった、都良香の「富士山記」が意味するところを考察する。更にかぐや姫伝説の展開を追うことで、中世末から近世に富士の祭神が「木花咲耶姫」とされていく女神信仰の淵源を探る。九世紀の漢詩文を、民間伝承の広がりの中に位置付け、時代を越えて捉えることは、従来なされていない。

火の山に託す「燃ゆる思ひ」

大和朝廷の神話『古事記』に富士山は登場しない。『常陸国風土記』（筑波郡）が史料としての初見である。古老の伝承として、筑波山の繁栄と比べて駿河の国の福慈岳（ふじのやま）が常に雪に覆われて登れない不幸が語られている。寒さと雪とは否定材料であって、「富士の高嶺に雪は降りける」と雪山を称えた山部赤人の叙景歌などは、『万葉集』の中では孤立した存在である。当時すでに、富士山を「大和の国の鎮め」とする表現（万葉集319）もあるが、都が西にあった時代はあくまでも駿河の国の、つまり異国の霊山で、「燃ゆる火」に託して恋が詠われる方が主流である。富士山は噴火によって、文芸に位置をもった。

平安時代はまさに活火山の時代といえる。記録に残る噴火は781年、800年～802年、864年の大噴火、905年の頃は「今は富士の山も煙たたずなり」（古今集仮名序）とあるので噴煙の途切れる時はあったろうが、937年、999年、1033年、そして1083年を最後に以後四百年間は鎮静化する。まさに平安時代を通して富士山は、断続的にせよ噴煙を上げ続ける「燃ゆる火」の山であったから、平安和歌が富士山を恋の「燃ゆるおもひ（火）」を表わす題材としたのは尤もなことである。都の歌人にとっては、その山容より炎と煙への関心が中心で、霊山へのまなざしは見えてこない。しかし『竹取物語』の結末が、最も天に近い山頂で不死の薬を焼いた煙が、現に今も立ちのぼっていると描くところには、神仙思想との結びつきがある。煙の登る先には、天上界のかぐや姫がいる。煙と

仙女との結びつきは、中国の故事・詩文に多くの例があり、外来の神仙思想の影響を受けた文人にとっては、富士山は魅力的な対象であった。

「富士山記」と仙女

代表的な作品が都良香の「富士山記」で、これは後の時代にも大きな影響をもたらした。都良香（834～879）は、山水を好み仙術を行なうといった神仙的人物として伝えられる（大江匡房『本朝神仙伝』）。「富士山記」は、今は散逸している「吉野山記」とペアで書かれたと言われ、どちらの山も役行者の伝承を持つ霊山であり、神仙境への憧れが根底にある。「富士山記」は、始めはその山容と裾野の広さなど地誌的な記事で進むが、すぐにその山は「神仙の遊萃する所」とされ、二つの民間伝承が採録されている。一つは、承和年中（834～848）に山の峰より孔を穿った珠玉が落ちてきたというもので、作者はこれを「仙簾の貫ける珠ならむ」と推測している。山頂には仙人の宮殿があり、御簾は美しい玉で飾られていると想像した表現である。二つ目は、貞観十七（875）年11月の祭りの時、晴れた昼間に白衣の美女二人が山頂の上で並んで舞ったのを見た、という土地の人々の証言である。

貞和年間は作者十代のことであり、貞観十七年は作者の没する四年前のことである。つまりこれらの奇事を伝える民間伝承は、作者と同時代のことであり、神仙的な興味からここに記し留めたと言える。続けて古老の伝として、「山に神有り。浅間大神と名づく」とも書かれている。甲斐の国に浅間神社が創建されたのは貞観七（865）年だそうだから（日本三代実録）、浅間の神への信仰は、９世紀には形も整い定着していた。そうした事実と共に、神仙境・蓬莱山の仙女への憧憬が富士山と重ねられている点が見逃せない。後の中世紀行文も、この天女の伝承に興味を示している。『海道記』には「昔ハ此峰ニ仙女常ニ遊ケリ」（1223年）とあり、『東関紀行』にも「白衣の美女有て、二人山の頂に並で舞ふ」（1242年）と書かれている。後に、山頂に日（火）の御子がいると言い伝えられるのも、この「富士山記」が淵源とされる。加えて、富士の山頂に住む仙女と化したかぐや姫の伝承が、麓の里に散在する。富士縁起には、かぐや姫の変容の姿が幾つも見られる。

一方、女神とは関係なく、富士山では多くの神々が山頂に集って司召のこと

などを決めるらしいと、麓で聞いた伝承を書き留めたのは『更級日記』の作者である。彼女は少女の頃、上総の国から海越しに見た富士山に鮮烈な印象をもっていたので、帰京の途、富士川の地で聞いた話が興味深かったのであろう。上総で過ごしたのは、1017～20年にあたる。そのころ富士山は、噴煙ばかりでなく「夕暮は火の燃えたつも見ゆ」と、火柱を目の当たりにしていたと証言している。神の坐す火の山であることが実感されたことだろう。

木花咲耶姫との結びつき

仏教色が強くなると、蓬莱山の仙女に生まれ変ることを否定する考えも芽生える。それは極楽往生を願うことと対立するからだ。『源氏物語』は「李夫人」や「長恨歌」など神仙的な大枠をもっているが、「夕顔」の巻には、蓬莱山に生れ変った楊貴妃の例は避けられて、弥勒菩薩が現れる未来を約束し合う場面がある。富士山の神も、一筋縄ではいかなくなる。中世になると、浅間の大神は浅間大菩薩と名を変える。神仏混交を腑分けする必要はないが、山頂の女神の行き場はどこなのか。麓や近辺の民間伝承の中に下りてきて、生き残ったのではないか。仏教の浅間大菩薩だけでは不満の、根生いの女神を欲する心性が、木花咲耶姫を呼び出したのではないか。それは、中世も末のことである。

山の神の娘である木花咲耶姫の産んだ三児が、ホヲリ（山幸）・ホデリ（海幸）・ホスセリと呼ばれることから、産屋に火を放ってホ（火）中で産んだ話が創られているが、むしろこのホは穂に通い、イザナミがヒ（火）を産んで死んだのとは区別されるべきだろう。木花咲耶姫は火を産んだから富士山の神となった、という図式は当らない。あくまでも木花咲耶姫は、農耕神、大地の神と考えるべきで、それも古代の神話から直接ではなく、土着の伝承の中に求められた女神だった。それに中世の富士山は、火の山ではない。噴火で宝永山の出来た1707年まで、ほとんど鎮静化していた時期に、木花咲耶姫は富士山と結びついたのだ。その淵源には、山頂に仙女を思い描いた平安朝文人の幻想があり、その後の民間伝承があったのではないか、という見取り図を立てておきたい。

今後、これらのテーマに関して資料を補強し、論証を詰めていきたい。

Ⅲ　富士山と能

山　中　玲　子

奈良と京都で生まれ発展した能楽にとって、富士山はそれほど縁の深い場所ではない。それでも富士山やその周辺を舞台にした作品はいくつか存在するし、ポピュラーな作品ではないがその名も〈富士山〉という脇能もある。この〈富士山〉は、現在は金春・金剛両流の所演曲だが、両流の詞章・演出は、別曲として扱えるほど異なっている。また、江戸時代には観世流の明和改正謡本に採り入れられたこともある。さらに、中心となる曲舞の部分が世阿弥作であること、金春禅鳳が従来の（＝世阿弥作の）〈富士山〉を新作発表の場のために新たに書き直したと自分で記していることなど成立に関する問題も多いため、その複雑な変遷については従来研究が重ねられてきた(1)。但しそれら能楽研究としての論は、あくまでも世阿弥と禅鳳時代の作風の違いであるとか、直接の出典、他の作品との関係などが興味の対象であって、富士山そのものをどう捉えているのかという本プロジェクトの観点とは少し異なっている。一方、富士山学の立場で能〈富士山〉を取り上げた論においては、改作の問題は無視され、役の設定について誤解がある場合などもある(2)。古代から現代まで通して富士山をめぐる様々な問題を考察する本プロジェクトにおいて、従来の作品研究とは違った視点から作品を読み直し、特に近世以降の富士信仰や富士のイメージと比較することで、新たな問題を掘り起こすことが可能と思われる。

世阿弥作「富士山」

世阿弥の音曲伝書『五音』には、「富士山」と題する謡物が収録されており、富士山の様子やかぐや姫伝説など、古今集注釈の説を採り入れていることが知られている。当該部分は現行の能〈富士山〉の曲舞部分と同じだが、それ以外の箇所については、厳密に言えば、世阿弥がどのような能を作っていたのか不明である。ただし前半は世阿弥作のものが現代にまで伝わっているとし、一方後半は、両流の形とは違い「火の御子」は登場せず、後シテかぐや姫が「不死の薬」を捧げ物として勅使に渡し、天女舞を舞う女体神能だったろうと考えるのが、定説となっている。

謡物「富士山」は、富士山の実景を描写しているわけではない。

［クリ］抑此富士山と申は、月氏七道の大山、天竺より飛び来るゆへに、すなわち新山と言ふとかや

［サシ］頂上は八葉にして、内に満池をたたへたり。神仙人間の境涯により、四季折々を一時にあらはし。天地陰陽の通道として。希代の霊験他にことなり

と、理念的な形容に終始しており、『更級日記』に見える「さまことなる山のすがたの、紺青をぬりたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色こき衣に、しろき袒きたらむやうに見えて…」のような印象的な描写はされない。能〈富士山〉の前場全体に目を広げれば、「先目前の有様にも、今は水無月上旬なるに、雪まだ見えて白妙なり」「さながら一季に、夏冬をみほの松原田子の海、いづれもあをみな月なるに、高嶺は白き富士の雪を」という詞章もあるが、これらも業平の有名な歌「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」の説明と結びついて説かれたもので、あくまで古典文学の伝統の中で培われてきたイメージにとどまっているのである。

世阿弥は東国に縁が無かったわけではない。彼は若い頃、父観阿弥に付いて駿河国に下っている。『風姿花伝第一年来稽古条々』によれば、観阿弥がそのとき駿河の浅間神社で演じた能は「ことに花やかにて、見物の上下、一同に褒美せし」ものだった。しかもその演能の15日後(至徳元年５月19日)に、観阿弥は駿河で客死しており、世阿弥にとって忘れることのできない出来事だったと想像される。その印象深い旅の際、富士山を目の当たりに見ているはずなのだが、日記や紀行、和歌等と違い、演劇としての制約がある能では、見たままの山の姿を描写するだけでは作品にならなかったのだろうか。今後さらに考えてみたい問題の一つである。

室町後期の能と富士山

禅鳳の〈富士之能〉は世阿弥作〈富士山〉の後半に火の御子を登場させて改作したものと考えられており、修験道への興味などと併せ、石井倫子氏により詳しく論じられている（前掲論文・注１）ので、ここでは触れない。禅鳳による改作版も、山の姿には特に関心を示さず、かぐや姫伝説や火の御子に関する

信仰に基づき、それを目に見える形にして舞台上に載せることに精力が注がれている。

一方でこの時代には、「富士の御池」の恐ろしい風習を描く〈生贄〉のような作品も生まれている。年に一度、吉原の宿の人々ばかりか通りがかりの旅人までもが籤を引き、池に住む大蛇へ人身御供を差し出す「富士の御池」は、宿場の近くの池ということになろうが、具体的な描写があるわけではない。そもそも、都で落ちぶれ東へ下って吉原宿にやって来る主人公一家の道行きにも、富士山の姿は謡われていない。同じ宿で、飛鳥井雅有が富士山を見上げ、『竹取物語』や『富士山記』の記事を思い浮かべた（『春のみやまぢ』）のとは大きな違いである。この能が描きたかったのは、東国の恐ろしい神事に巻き込まれた者の悲劇と、それを救う「火の御子（富士権現の御使、と名乗る）」の活躍であって、そこにそびえ立つ富士の姿ではない。都からは遠く離れた東国の、しかしそれなりに栄えているいわば「外国」のような土地の恐ろしい風習を描く際、他の場所ではなく「富士の御池」が設定されたこと自体には意味があろうが、能作者の興味は雅有とは明らかに異なっている。

同様の傾向は、まったく別の曲趣を持つ〈羽衣〉にも見て取れる。富士山を面前にした美保の松原が舞台となるが、富士山は、雪を頂く姿が遠景として「美保が崎、月清見潟富士の雪…」とほんの一言触れられるだけである。また、シテの天女は最後は天に帰っていくが、富士山の中に消えていくのではもちろんないし、富士山を通って天に昇っていくわけでもない。美保の松原、愛鷹山、富士山を次々に下に見て、上昇していく。このとき始めて描写される富士山は、天女に見下ろされる人間界の風景の一部にすぎない。

近世の能に描かれる富士山

しかし、こうした事情は、江戸時代になると変わってくる。〈富士見小町・富士天狗・富士上人〉等の謡曲は上演記録もなく、江戸時代の趣味人による戯作として、従来の能楽研究ではほとんど研究対象とされない作品群である。が、これらの作品の詞章からは、富士の女人禁制の話や山頂での修行、霊場の賛嘆など、先述した世阿弥たちとは違った富士山の捉え方、接し方を読みとることができ、本プロジェクトのような視点からは、注目する価値があると思われる。

さらに、こうした戯作調の作品群と並んで、十五代観世大夫観世元章による明和改訂謡本に収められた〈富士山〉の問題も、興味深い。彼は、金春・金剛の両流でしか上演されていなかった〈富士山〉を、観世流のレパートリーとして新たに取り入れた。そのこと自体、国学に造詣の深かった元章の富士山に対する強い興味の反映として注目されるが、さらに謡曲詞章を、日本のシンボルとしての富士山を強調するような文句に改訂しているのである。先に世阿弥作の謡物から引用したのと同じ箇所は、

［クリ］抑此冨士山と申ハ、三国第一の名山、神の御代より動きなく、吾日の本の鎮とかや。

［サシ］頂上は八葉にして、中央に一の神池あり、仏神応護の霊場なれば、四季折々を一時にあらハし、其高き事雲上にいでつゝ、いくばく丈といふ事をしらず。

と変えられている。また、後シテは「（かぐや姫と）薬を飲むで契りをなせる、ひこ神とハ我事なり」と名乗っており、不死の薬を飲んだ帝が神になったという設定である。さらにまた、明和改正謡本（版本）においては「富士」はすべて「冨士」と、点の無い漢字で記されており、浅間神社本宮以外は「冨士」を用いるという当時のルールにきちんと則っている。こうした変更は、あくまで元章個人の趣味的な改訂として従来の作品研究では無視されがちであったが、先述の戯作と同様、江戸時代における富士信仰の広がりとも併せて考えることにより、より広い視野が開けてゆくだろう。

注1　伊藤正義「謡曲『富士山』考―世阿弥と古今注―」（『言語と文芸』69年５月）
　　石井倫子『風流能の時代　金春禅鳳とその周辺』（東京大学出版会　98年）
注2　竹谷靱負『富士山の精神史　なぜ富士山を三峰に描くのか』（青山社　98年）

Ⅳ　江戸富士講の拡大
――食行身禄入定の思想と社会的背景について――

澤　登　寛　聡

はじめに

享保18年（1733）７月17日、食行身禄（じきぎょうみろく）と名乗る富士信仰の行者（伊藤伊兵衛）が、富士山七合五勺の烏帽子岩において約１か月の断食修行の末に入定した。入定とは一定の宗教的確信にもとづく瞑想によって死を得る行為である。身禄の入定は、従来の富士信仰と異なった新たな富士信仰を形成させていった。

このような江戸時代後期における新たな富士信仰はどのような社会史的な特徴を持っていたのだろうか。ここでは、これらの点を検討する前提として、食行身禄の入定の思想、また、入定前後の江戸の社会的事情および身禄の富士信仰思想についてスケッチを描き、中間報告としておきたい。

食行身禄の富士山入定

食行身禄は寛文11年（1671）正月、伊勢国一志郡本川上村で生まれた。氏名を伊藤伊兵衛といった。天和３年（1683）の秋、13歳で江戸日本橋本町一丁目の富山平左衛門の店に奉公した。

その後、平左衛門の養子となって店を継ぎ、石町や神田筋の数か所に太物や油の店を出したとも、あるいは、当初は神田の親類の世話になりながら附木・茶袋・灯心の振売を行っていたとも伝えられる。富山平左衛門の商いは、薬種店とも呉服店ともいわれる。こうした過程を経ながら身禄はしだいに富士信仰へと入っていく。

これを江戸日本橋鉄砲洲に住んだ富士講先達の長島泰行編「冨士山行者元祖代々之系図」の「六世　烏帽子岩元祖　食行身禄術」によってみると次のように記されている。

身禄は俗名を伊藤伊兵衛といって、延宝５年（1677）、富士信仰に共感して行者となった。その後、巣鴨仲町の野口弥右衛門の地内に移り住み、油を売って暮らしたが、元禄元年（1688）6月15日、師の月行とともに富士山への登山修行によって禅定を果たした。

この後、日常的な信仰儀礼や毎年の登山修行を繰り返し、享保18年（1733）６月13日から７月13日までを目標として富士山の七合五勺の烏帽子岩で31日間の断食行を開始し、翌７月17日に入定した。なお、身禄は７月17日に行年63歳で入定したが、みずからの命日を生前から7月13日と定めていた。これによって富士講の人々のなかで身禄の命日は７月13日とされている。

身禄は、断食修行の間、毎日、富士信仰思想について口述した。この内容は、弟子の田辺十郎右衛門（北行鏡月）によって筆記され、『三十一日之御伝』と称される富士講の教典にまとめられた。

入定前後の社会的事情

身禄の入定した享保18年７月前後は、江戸幕府による享保改革の真只中であった。しかし、この年の正月には、米価の高騰によって高間伝兵衛騒動が起こっていた。

高間伝兵衛騒動は、米価高騰にともなう江戸での最初の打ち毀しとして広く知られている。この時期、幕府は下落する米価の回復・安定を意図し、下り米問屋の高間伝兵衛を中心とする江戸の米商人を大坂に派遣した。そして、幕府大坂金蔵の資金を使って大坂で米を買い入れさせ、この伝兵衛を中心とする米商人に上方米の江戸での独占的取捌方を命じた。これによって米価の調整・回復政策を実施しようとしたのであった。

しかし、享保17年７月、日本列島は西国・中国・四国筋の蝗害によって大規模な凶作に遭遇する。この凶作を契機とする飢饉によって事情は一変し、幕府は、急激な米不足と米価の高騰による人心の不穏に悩まされる。

幕府は、米商人を使って飢饉に対処し、江戸で消費すべき米を西国へと廻米した。このような政策の影響で、この年の冬には江戸市中でも深刻な米穀払底・米価騰貴におちいる。

翌18年正月、江戸市中では、町人や借家・店借・裏通りの町の人々までもが一体となって集結し、幕府の江戸廻米制限令・特定米穀問屋制度の撤廃と米穀の自由売買とを町奉行所に訴願・要求し、廻米制限の撤回と救米の給付を決定させた。

だが、米価の高騰は治まらず、20日前後から人々は、町奉行所に対し、米価

の高騰は高間伝兵衛を始めとする７軒の問屋が米を買い占めているからだとして伝兵衛の身柄を町中に引き渡すように要求した。23日、伝兵衛は人々の非難を恐れて自分の所持する米18万石のうち、２万石を幕府に廉価で売却した。また、幕府も、これを救米として人々に販売し、人心の平穏を回復しようとした。しかし、26日、約1700人から4000人といわれる人々は、伝兵衛を召し捕らえると呼号して本船町の本店に押し寄せ、これを打ち毀すにいたった。

食行身禄の信仰思想

飢饉の惨状や打ち毀しを眼のあたりにした身禄は、多数の餓死する人々を出した江戸での飢饉が、関八州から江戸への米の出荷を抑制し、市中に米を安く売り出すことを禁じた幕府役人の失政にあると批判した。そして、人々の苦難を救済し、弥勒の世を実現するためとして富士山において入定した。

身禄が、弥勒菩薩の弥勒を比喩した表現であったことはいうまでもない。弥勒菩薩は、釈尊が入滅して56億7000万年後に都卒天から下生し、釈尊によって救済されなかった人々を救う尊格とされている。

身禄によれば、この弥勒の世は、身禄が師の月行とともに初めて富士山へ登拝した元禄元年（1688）６月15日に「身禄の世」として開始された。現実の世の中は、役人や富貴の人々の心に悪が乗り移り、これによって多くの人々のなかにさまざまな不幸が発生する世界である。この意味で人々が必ずしもストレートに救済される社会ではない。

身禄の世は、このような現実に生きる人々が、神道でもなく、儒教でもなく、また、教団化された仏教でもないアジア的な宗教思想によって精神的に救済され、人々の幸福が実現する世をさしていた。

救済が実現されるには、人々が「誠の道」の実践によって信仰を深めていくことが必要とされた。身禄によれば、誠の道とは、正直・慈悲・情・不足を旨とする日常的な生活規範によって実現されるとする。

身禄は、人間の本質的な平等性を求めながらも、封建制の身分制的秩序、すなわち、政治的なシステムとしての差別の構造をとりあえず容認し、人々が物質的にも精神的にもより豊かな安定した暮らしを求めていくための世界観、実践的な生活規範を提示した。身禄は、このような信仰思想の実践によって人々

が救済されると主張し、富士山に入定したのであった。

まとめに

食行身禄の入定以後、江戸時代の富士信仰思想は、密教の影響を強く受けた修験道系の信仰思想から弥勒信仰へと大きく変化していった。また、ここでいう弥勒信仰は、仏教的な意味での信仰をこえた宗教的救済思想としてアジア世界に広く分布する民俗宗教としてのミロク信仰と深くかかわっていたとの指摘もある。

宗教を理解する場合、筆者は、これを宗教思想・宗教組織・宗教的実践という３つの視点から検討していくのがよいと考えている。

そこで、これら３つの視点から江戸時代の富士信仰を分析・考察し、これをもって朝鮮や中国を含むアジアの人々における宗教的な救済思想＝終末思想にもとづく社会運動と比較・検討していく途を得ようとするのが、筆者の研究の最終的な課題となる。今回の報告は、そのためのささやかな中間報告である。

参考文献

井野辺茂雄『富士の信仰』（1928.12）
安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（1974.9）
宮田登『ミロク信仰の研究 』（1975.12）
岩科小一郎『富士講の歴史』（1983.9）
筆者編集担当『富士吉田市史』（史料編　第五巻　近世Ⅲ）
筆者執筆部分『富士吉田市史』（通史編　第二巻　近世）747～830頁。
拙稿「富士信仰儀礼と江戸幕府の富士講取締令」（『法政大学文学部紀要』第47号2002.3）

Ⅴ　時代小説と富士山

横　山　泰　子

本研究は、時代小説（近現代大衆小説の一ジャンル、明治以前の日本の過去を素材としたフィクション）において富士山がどのように描かれているかを考察する。

筆者は時代小説の地誌的な要素に関心を持ってきたが、富士山を扱った作品を特に意識して考察したことはなかった。それゆえ、本研究プロジェクトに参加するにあたっては、まず富士を扱った作品をできる限り数多く収集することが第一の課題となった。そして、それらを解釈・分析する過程で、古典における富士山との関係を明らかにする必要がある。古代から日本人は富士を文学作品で多様に描いてきたが、伝統的な富士文学の系譜のうえに、時代小説の富士も置かれるよう、考察しなければならない。また、時代小説は物語こそ明治以前に設定されてはいるが、作者及び読者は大正以降の近現代人である。つまり、物語世界自体は歴史的な過去であっても、近現代人にとっての富士観が作品の富士山に反映している可能性がある。これらのことを念頭に置いて、研究をすすめる。

作品分類の試み

富士山を描いた時代小説はおおむね、以下の三つに分類できると思われる。

一　題名などに「富士」の名が入っており、富士山のイメージが作品の全体像に関係してはいるが、作品の中で富士山周辺が舞台となってはいないもの。

二　作品の中で富士山周辺が舞台とされる箇所があり、富士山のイメージが作品の全体像に関係してはいるが、史実に直接取材してはいないもの。

三　作品の中で富士山周辺が舞台とされる箇所があり、富士山の過去の歴史を直接素材としているもの。

一のグループには、山手樹一郎作『朝焼け富士』などが属する。『朝焼け富士』は、題名に富士の名があるものの、作品の中で富士は物語の最後の最後まで出てこない。二人の主人公の男女が、多くの困難を経て結ばれる、その背景

に「朝焼けの富士が見える」という、いわばそれだけである。だが、朝焼けの富士の美しさが、主人公の将来を象徴している。こうした作品は、富士文学の系譜のうえでは亜流に属し、作品数も少ない。しかし、こうした題名が小説につけられることじたい、富士山が「美しい山」として、高い知名度を誇っていることを示す。他の山の名前では読者を惹きつけることが難しいと思われる。富士山の特殊性のあらわれといえる作品群であるとして、あえてグルーピングをしてみた。

富士の裾野のイメージ

二の例としては、白井喬二作『富士に立つ影』を挙げる。白井の『富士に立つ影』は、文化二年から明治六年にわたる、熊木・佐藤の築城家の対立の歴史を描いた大長編である。富士の裾野に幕府の調練場を作る計画が持ち上がり、築城術に勝れた者にこの仕事をまかせるということから、熊木伯典・佐藤菊太郎の両名が争い、その葛藤が次世代、さらに次世代へ続いていく。三田村鳶魚は「幕府の調練場計画など、全く史実にないでたらめ」として、白井を批判している。三田村の批判どおり、『富士に立つ影』は史実には即していないながら、富士の裾野のイメージをうまく作中に使っている。

富士の裾野といえば、富士の巻き狩りが思い浮かぶ。源頼朝の大規模な狩猟と、曾我兄弟の仇討ち、という「武士が力を見せる場」としてのイメージが富士の裾野にはある。『富士に立つ影』は、こうした富士のイメージを継承し、富士を背景にした両家の闘いを描いたのである。また、明治四十五年、日本陸軍は地元との間で「富士裾野演習場使用協定」を結んでおり、白井が大正十三年に『富士に立つ影』の連載をはじめた頃には、すでに富士裾野は常設の陸軍演習場として活用されていた。このことが、『富士に立つ影』の設定に直接影響を与えたものと思われる。また、白井の『富士に立つ影』では、幕末から維新へと変転する時代の流れに人間たちが飲み込まれていくさまを、富士のみが見おろすという構図がある。これは神の山として、富士が神聖な山であることと関わっている。吉川英治の『燃える富士』にも同様の富士観が見てとれる。

恐るべき自然との闘い

第三のグループは、富士山の過去の歴史に直接取材した作品群である。もっとも小説の世界は人間が主体である。それゆえ、富士山の過去の歴史に取材するとはいっても、山そのものを主人公にした小説は書きにくいため、過去の日本人が富士山という大自然に対してどう働きかけたかを描いたものが主体となる。

三のグループの中では、新田次郎の作品が興味深い。富士山観測所に勤務し、富士山気象レーダー建設に携わった経験を持つ新田は、富士山に愛敬の念が深い作家である。新田は特に資料を重視し、富士山に関わった実在の人物を主人公とし、富士の過去の姿を描き出した。『怒る富士』は、宝永山大噴火の後、飢餓に苦しむ農民を助けた代官伊奈半佐衛門が主人公である。伊奈半佐衛門の奮闘を主軸に、被災地の人々の長く果てしない闘いと、噴火が起こってもすみやかに民衆を救うすべをもたない幕府政治が総合的に描かれる。地元の苦しみを見かねて、伊奈半佐衛門は幕府の米蔵をあけて民を助け、その責任を追わされて切腹し、後に神にまつられるところで物語は終わる。伊奈の死の原因は公的な記録からは明らかではないが、地元では民のために死んだという伝説がある。作者はこの伝説を重んじる立場で資料を読み、伊奈の生涯を描いている。そして、富士山の噴火によって、人間の平和な生活がくつがえされる過程を描写し、『怒る富士』という題名にある如き、火山としての富士山の恐ろしさをリアルに表現した。宝永山噴火は、過去の事件であるが、富士山爆発は現代の問題でもある。『怒る富士』は、昭和四十八年に書かれたものだが、今こそ読み直されるべき作品ではなかろうか。

諸田玲子の『笠雲』は、明治維新後、富士山麓の開墾を行った清水次郎長一家の物語である。明治七年に山岡鉄舟は静岡県令大迫貞清とはかり、清水次郎長に囚人を使って開墾にあたらせたが、その史実に取材した。物語は次郎長ではなく大政が主人公で、次郎長の命令で開墾を仕切らなければならなくなり、自然を相手に格闘する過程を描いたものである。『笠雲』における博徒は、富士では喧嘩や博打が強いことは何の意味も持たないと知り、ねばり強く勤勉に自然に向かい合わねばならなくなり、生き方を変えていく。現代よりも文明の力が劣っている過去の社会において、非力な人間が恐るべき自然を相手に闘う、

様子が印象深く描かれている。人間と自然の闘いの激しさは、現代小説よりも時代小説の方が明確に感動的に描けるのではないかと思われる。

以上、富士山の扱われ方によって小説を分類してみた。時代小説に限らず、いっぱんに大衆小説は作品の数量がきわめて多い。その中から、より多くの富士にまつわる作品を集め、個々の作品解釈を深めるとともに、富士山のイメージをより総合的に掴んでいきたい。

＊　　＊　　＊

以上をもって、「富士山をめぐる日本人の心性」を探る共同研究の、五人による中間報告とする。以後、このメンバー以外の協力も仰ぎ、考古学、歴史学、民俗学、文芸学、図像学などを動員して、成果をまとめるつもりである。当然国際的な視野を取り込みつつ、富士山をめぐっての心の変容と普遍とを抽出し、日本学研究としたい。

（天野 紀代子）